



ほんものを たべよう

Alter Weekly Order Catalogue

2017.2月3週号

提出日	2/7	火	水	木	金
配達日	2/14	火	水	木	金
翌々週分配達日	2/21	火	水	木	金

オルターの提案

本当に安全な食べものを手渡すために

- 「だれが・どこで・どのようにつくったか」の情報を日本一公開します。
- 「国産」「無農薬」にこだわり、日本の伝統食を守ります。
- 原料段階・飼育段階からポストハーベスト農薬、遺伝子組み換え、放射能汚染、トランス脂肪酸、食品添加物などを徹底的に追放します。
- プラスチック容器・レトルト食品を追放します。

野菜 VEGETABLES

大規模で継続できる 自然栽培に挑戦中

おいしい品種をとことん追求。



(有)ベルセゾンファーム・折笠農場(北海道)

文責 西川 榮郎(NPO 安全な食べものネットワーク オルター 代表)



ベルセゾンファーム・折笠農場 折笠 健代表

オルターへは自然栽培のものを提供

北海道十勝平野、幕別町の(有)ベルセゾンファーム・折笠農場 折笠 健 代表は、自然栽培や特別栽培に取り組み、小麦、黒大豆、小豆、ジャガイモ、トマト、リンゴなどを栽培しています。

そのうち、オルターへは自然栽培のものを提供していただきます。

折笠農場についてはオルターカタログ(2015年10月5週号参照)でヴィヌーベルの自然栽培小麦使用ドーナツの原料小麦粉生産者としてご紹介しました。オルターのでんぷんの生産者、神野でんぷん工場(オルターカタログ2010年2月1週号参照)へ原料用ジャガイモの提供もしていただいています。

無農薬へ舵を切ったのは3代目

折笠 健さんの先祖が開拓農家としてここを切り拓いたのは約100年前。健さんは4代目になります。

父で3代目の折笠 秀勝さんは、農業・化学肥料を駆使して生産性を高めていたビート栽培(ビートは地力をたくさん吸い取って成長する作物)で、次々と現れる病気から地力の衰えを実感し、破滅へ向かって突き進んでいくような農業をやめて、「開拓時代の豊かな土地を

取り戻したい」と、当時としては珍しい緑肥を導入した「ジャガイモ」栽培へと切り替えました。十勝で一番の成績を2年にわたってあげた次の年、2代目たちの猛反対を押し切って、ビート栽培からの撤退しました。「安心、安全、自立した農業」さらに「有機、無農薬」を目指し、特別栽培へと舵を切りました。

その販路として、関西の生協などをひとつひとつ自分で訪ねて開拓しました。40年以上前の話です。

自然栽培は「奇跡のリンゴ」 木村 秋則さんがきっかけ

4代目と3代目が自然栽培に取り組み始めたのは10年前です。その3年前に「奇跡のリンゴ」で話題となった木村 秋則さんと3代目が意気投合したのがきっかけでした。現在、折笠 健さんは「木村秋則自然栽培研究会」北海道会長を務めています。

自然栽培は10年間で5回以上の失敗をし、土作りの難しさを経験しました。専門家にも協力してもらい、熱心に土壌学、微生物学、昆虫学を学んでいます。栽培圃場95ヘクタールのうち、自然栽培は約30%の27.6ヘクタールです。大規模で継続できる自然栽培に挑戦中です。有機JAS認証を取得しています。

自然栽培も品種の研究が大切

昼夜の寒暖の差の大きい北海道で自然栽培するのですから、おいしい作物ができるのは当然ですが、折笠 健さんは、品種にもこだわっています。おいしさ、耐病性など品種を選ぶ根拠を大切にしています。

ジャガイモは「さやあかね」「インカのめざめ」「ノーザンルビー」「シャドークイーン」などを選んでいきます。毎年40種類のジャガイモ品種をテストし、有機に向くものを調べています。各地で試食会を開催し、おいしさの根拠をデータ化しています。

小麦は栽培生産の数が少ない貴重な「はるきりり」です。育種からかわかりました。クロワッサンやデニッシュに向く小麦で、子どもたちがおいしいと評価しています。

黒大豆は「黒千石」「祝い黒豆」を栽培し、それぞれきなこに加工しています。「黒千石」のきなこは淡泊な味、「大袖の舞」のきなこは風味・甘みに優れています。「祝い黒豆」のきなこは甘味に特徴があります。大豆の品種は「大袖の舞」です。おいしい大豆として有名豆腐店などで採用されています。2016年にはリンゴ栽培にもチャレンジしました。

ベルセゾンファーム・折笠農場の 自然栽培農作物 ★★★★★

有機JAS認証団体 北海道有機認証センター

●栽培品目

小麦、黒大豆、小豆、ジャガイモ、トマト、リンゴなど

●施肥

収穫物以外のガラなどを畑に残すだけで、化学肥料はもとより、堆肥、ぼかしも使っていません。

●防除

農薬の使用はありません